ふくりゅう

発行所　日本下水文化研究会運営委員会
発行責任者　酒井　彰（運営委員会副代表）
発行年月日　平成10年7月15日
印刷所　（株）愛甲社
編集　小松建司　高橋敬一　斉藤由勝
夏号（通巻12号）

小さな技術と大きなこころざし
（雨水利用市民フォーラムへ参加するに当たって）

酒井　彰

東京下町の向島界隈。関東大震災で一番大きな被害にあった墨田区のなかで、奇跡的に被害の少なかった地域である。そこに今、災害に強いまちづくりを目指し、雨水利用が盛んに行われている。下水文化研究会では、昨年の「下水文化を見る会」で、「雨水利用を進める市民の会」の徳永暢男さんにこの界隈を案内してもらった。各戸の雨水貯留槽は「天水尊」、地域の空地や集会所前などに設置される雨水貯留槽は「路地尊」とそれぞれ呼ばれている。徳永さんは、雨水リサイクル研究所の所長として、天水尊の製作も自ら行っておられる。

都市化が進むと、生活や産業に必要な水はインフラストラクチャーとして、オカミがダムから水道、そして使った水を捨てるための下水道を用意してくれる。都会で生活するうえでは、雨も厄介物になる。東京の環七の下には巨大な人工の川が造られている。最も年に何度も流れるわけではないので、川と呼べるかどうかわからないが、いずれにしろ、使いたい水も要らなくなった水も土木技術に頼った公共事業のお世話になっている。大都市で生活する人々にとって、水は、知らない所から運ばれ、知らない所へ運ばれていき、人間にとって都合のいいときだけの付き合いとなってしまっている。

普段は都会では暮らしていないあるナチュラリストといわれる人が、都会で泊まるときはいつも聞いているせせらぎの音が無く寝付けないので、蛇口から水道水を流しながら一種のサウンドスケープを試みているそうである。大分前のことだが、そのことを取り上げ、業界紙がとんでもないことだと息巻いていた。その理由はおそらく水の無駄遣い、都会では都会らしい生活をしろ、といったことであろう。しかし、このことを非難できるであろうか。都市生活者は、水道が引かれたことにより、その源に思いを巡らすことを忘れ、下水道がつながったときに使った水の流れて行く先を意識することが無くなり、コンクリートで覆われた都市から雨水をできるだけ速やかに運んでいくために造られた三面張り、カミソリ堤防と呼ばれるコンクリート擁壁の都市河川によって、川への親しみと畏敬の念を忘れ去ってしまったのではないかと思う。そして、オカミ意識が強くなり、住民自らが果たすべき責任の放棄がそこにみられてくる。つまり人と水との距離が際限無く遠ざけられてきたのが、今までの都市に住む人と水との関係だろう。

先のナチュラリストは、確かに水の無駄使いをしているのかもしれないが、水との距離が非常に近い生活をしている人にとっては、せせらぎの音が何よりも大事なものなのかもしれない。今、そんなふうに水との距離を近づけたいという人の行動を非難することができるであろうか。

そこで、冒頭の雨水利用のことである。雨水利用には水資源として使うだけでなく、貯めることによって流れ出る雨の量を減らし、ゆっくり川へ流せば普段水の無い都市河川も潤うなどの効果があるとされている。エンジニアの感覚からしたら（小生、自分自身今でもエンジニアであると思っているが）、「雨が降らなければ水は貯まらないんだし、渇水のときに使えるとは限らない。」とか、「たかが1tや2tの水槽を1万個造っても、大雨のとき水が残っていたら洪水が防げるわけが無い。」などと言って、こうした小さな技術に対して遠くからやや冷ややかに見てきたような気がする。これは、エンジニアとして教育されるときに、例えばある水を浄化できる原理があっても、それが定量的に効果が明らかでなければ工学的技術として認められないと教えられてきたためであろう。

でも近頃少し違った見方も必要だと思うようになってきた。そのきっかけは神戸の大震災であっただろうし、1年前の転職であっただろうと思う。工学的に見たら、効果が小さいかもしれないが、水資源の使い方にもTPOがある。向島地区は、災害のとき消防車も満足に入れないような街並みである。雨水を貯めておくことは神戸で問題になった初期消火に役立つだろうし、災害時の水源にもなる。夏の夕方の散水や、子供たちの水遊び、クラインガルテンの水やりなどにも利用できる。また、向島地区は一軒の敷地は狭く、地盤が悪くて低いところで、たった 250リットルの「天水尊」設置も容易でなく、建築家の腕の見せ所も少なくないそうである。「天水尊」を設ける時の苦労と喜びを分かち合うことで、コミュニティの形成にも寄与できるだろう。ところで今、コーポラティブハウジングなどで雨水貯留槽の需要が大きいそうであるが、技術的にはこの地区で雨水利用がうまくいったら日本中どこでもできるといわれている。

神戸の震災の後、日本の都市にはすき間が無いことが指摘されている。それは単に空間的なすき間だけではなく、時間的なすき間（余裕）、計画的なすき間（柔軟性・余白）が無いことも含めて考えていきたい。すき間といってもただ空けておくばかりが能ではないだろう。すき間をリジットに埋め尽くし、いざと言うときに大きなリスクを背負うことが問題なのであり、雨水利用のような小さな技術によって、すき間を柔軟に埋めていくことを考えていくことは大切だと思う。それぞれの地域で使い方を工夫する余地があるし、それが住民に任されるのだから、生活に身近な技術である。水との距離を再び近づけ、住民が水や環境に接し関心を抱くきっかけをもたらす技術と言える。

そんな意味で、志しの面では大規模で高度な技術にひけを取らない技術である。大きな志しをもった小さな技術とは、雨水利用を進める市民の会会長の辰濃和男さんの言葉である。

「健全な環境は家庭から」

今月末に刊行予定

平成9年度事業計画で実施することになっておりました、家庭で使用される有害化学物取扱いガイドライン「健全な環境は家庭から」は、7月末には刊行される見通しとなりました。この小冊子は、米国ボストンにあるMWRA(Massachusetts Water Resources Authority)が一般家庭を対象に、家庭で使用される有害物(household hazardous waste)をクリーナー、殺虫剤、塗料・溶剤などに分け、そうした製品がどのような環境リスクをもっているのかを示すとともに、買うとき、使うとき、捨てるときの留意事項をまとめた"A Healthy Environment Starts at Home"の翻訳です。そして、このような化学物質を使わない代替方法を提案しています。これはいわば生活の知恵といえるものと思います。(5月には翻訳することについて快諾が得られました。)

小冊子では、この翻訳とケンタッキー州で行われている有害廃棄物の回収システムを紹介しています。このような化学物質を売ることを認めている以上、その回収に公共が関与するのは当然といえるでしょう。日本にはまだ適当な回収システムがないので、この小冊子に書かれていることの実施が難しいものもあります。気をつけてください。

化学物質に依存する生活は便利かもしれませんが、決して豊かな生活とはいえません。今日、ダイオキシン、環境ホルモンと環境問題の根っこはわれわれのごく普段の生活と強く結びついています。この小冊子にはすぐに実行できそうな提案も含まれています。そして、こうした有害物が流れ出すルートとして、都市における雨水の流出があります。そんなわけで、雨水利用市民フォーラム(本号記事参照)で是非とも配布したいと思っています。

「雨水利用市民フォーラムへ2編のポステー出展」

雨水利用市民フォーラムは8月8日(土)に開催されますが、本会からは2編のポスター展示を行うことにいたしました。

①『雨・江戸川柳』　(栗田運営委員)

②『都市雨水の質的な制御に関わるいくつかの課題』　(酒井副代表他)

歌謡曲の歌詞やタイトルで数多く使われている「雨」という言葉とはうらはらに、今日においては、市民が雨に直接かかわる部分はますます小さくなってきています。都市生活者は、それをただ便利だと感じ、雨の問題は何でも行政にお任せしてきたおかげで、雨がもたらしてくれる恵みも楽しみも忘れてしまうようになってしまったようです。恵みを感じ、雨を生かすには、厄介だといって遠ざけてきた雨にもう一度近づいて、つきあいなおしてみる必要があるのではないでしょうか。

会員の方はもちろん、多くの方を誘って参加してみてください。水や環境に関するNPO・ボランティア団体の活動を知り、接する良い機会であり、本会のネットワークの輪を広げるチャンスです。

「運営委員会だより」

4月より、新しい構成でスタートした本会運営委員会ですが、新メンバーを含め活動を進めています。「ふくりゅう」のこの号でお知らせしている企画のほか、次の活動に重点的に取組んでいこうと思っております。

(1) 広報の充実:機関紙の発行(9月の予定)を機に会員拡充を目指したいと考えています。そのために会の存在をアピールできるように、パンフレットの発行、ロゴマークの作成、ホームページの開設に取組んでいきたいと考えています。(先号でもお知らせしましたが、ロゴマーク、英文名称、レターヘッドの募集を行っています。)

(2) NPO法に基づく「特定非営利活動法人」の法人格取得:NPO法は年内に施行される運びになっているようです。今一度法人格を得ることのメリット、デメリットを確認した上で準備に取りかかっていきたいと思います。

(3) 来年度、再来年度の本会記念行事の企画(1999年はバルトン没後100年、2000年は下水道法制定100年に当たります):本会の活動成果を企画に生かせるよう、運営委員の間でたたき台を持ちより、早急に準備に入りたいと思います。

どれも、われわれだけでは手に余る大きな課題です。運営委員会での話合いの状況は適宜お知らせしていきたいと思いますので、会員諸兄からもご意見、アイデアをお寄せいただきたいと思います。

募　集

日本下水文化研究会の*英文名称*、*レターヘッド*及び*ロゴマーク*を募集しています。応募は、この3点のうちの1点だけでも結構です。奮って応募して下さい。採用の方には粗品進呈いたします。締め切りは8月いっぱいとさせていただきます。

申込先は、原稿の送付先と同じです。

報　告

「別の道」へ

第一回定例研究会　稲場教授の講演「アル・ゴアの環境思想」を聴いて

栗田　彰

アメリカ副大統領のアル・ゴア氏が、レイチェル・カーソンの「沈黙の春」に序文を書いた。日本では「沈黙の春」は新潮文庫から出ている。なのに、新潮社は新潮文庫の「沈黙の春」にゴア氏の序文を載せることをしない。なぜだろう？。

しかし、新潮社がそうであるために、この「序文」は日本では稲場紀久雄教授がブックレットのかたちにして、大阪経済大学生活協同組合から発行することが出来た。しかも、「日本の学生諸君に」というゴア氏のメッセージつきで。環境保全に対するゴア氏の若者たちへの期待の大きさがわかる。

いま、水の破局が近づいている。なぜ、そうなったのか。ゴア氏は言う。『現在のシステムは、ファストの悪魔との契約、つまり長期間の悲劇という犠牲を払って短期間の利益を得るものに他ならない』と。利便性と経済性が優先され、人の心が忘れられた。それがいまの社会システムではないか。

衝撃的な詩がある。「ター君の残した詩」である。

黒くけがれた空を見上げてぼくは考えた。／あんたらはぼく達に何を残してくれたというのか／テレビか車か海外旅行か宇宙への旅立ちか国際社会か／ぼく達はそんなもの何一つ望まない／ぼく達が求めるのは／土の匂いなんだ／風の匂いなんだ／青い空なんだ

地球の行く末に心を痛めていた１６歳の少年ター君は、この詩を残して自殺したという。少年ター君の自殺の新聞記事を読んだ同い年の少女は新聞に投書をせた。

息をするのが苦しくなって涙が出てきて止まりません。私は彼の詩に感動しましたが、彼の生き方に反感を覚えずにはいられませんでした。「どうして死んでしまうの。あなたのような人こそ地球のために必要なんじゃないの」。でも、涙が出たのは彼の生き方がまぶしくてうらやましくて自分があわれに思えたからかもしれない。ペットボトルを川に投げ捨てる友だちに何も言えなかった私。この記事を読んで、次は言えました。「そんなところに捨てるんやったら私、持って帰るわ」。失われているのは自然と「ヒト」との絆ではないでしょうか。

「ター君の残した詩」と少女の投書記事は講師の奥様であり、当研究会会員でもある稲場日出子氏によって朗読された。

日本の政治家や財界人たちは、この詩、この投書をどう受けとめるだろう。期待は出来ない。しかし、世界の潮流は『長期間の悲劇という犠牲を払って短期間の利益を得る』道とは別の道、カーソンの言う『地球の安全を守れる』道を進みつつある。政治家や財界人によってではなく、世界中の消費者の「知る権利と学ぶ義務」によって、そうして１６歳の少女のような「勇気」によって別の道、これからの社会システムがつくり出されて行く。

稲場講師は熱っぽく説く。生命の尊さ。その生命に欠かすことの出来ない「水」の大切さ。そして「ゴア氏の環境思想を学んで欲しい」と。最後に再び稲場日出子氏によって、別役実氏の詩「誰も知らなかった、気がついたときは遅かった」が朗読された。

お知らせ

日本下水文化研究会　主催

「'98 バルトン忌」の御案内

本会の恒例行事となりました「バルトン忌」の時期が近づきました。今回はちょうど100回忌となりますので、これを記念して右記の開催要領のとおり、バルトン碑墓参の前に、斎藤博康氏(前・日本水道協会研修・国際部長)に、バルトンにちなんでの特別講演をお願いしています。同氏が一昨年に「英国上下水道物語」(日本水道新聞社発行)を翻訳・出版されたことは、既にご存知の方も多いと思いますが、ご豊富な国際経験を基にしての大変貴重なお話が聞けることと思いますので、どうぞ奮ってご参加下さい。

「'98 バルトン忌」開催要領

日　　時: 平成10年8月5日(水)
14:00～16:30(受付開始13:30より)

場　　所: 「西麻布福祉会館」
2階 集会室B
港区西麻布 2－13－3
TEL 03-3486-9166
交通最寄り駅　(別添地図参照)

地 下 鉄: 千代田線「乃木坂」駅下車 徒歩10分
日比谷線「六本木」駅下車 徒歩11分

特別講演: 「バルトンと台湾の水道」
14:00～15:30

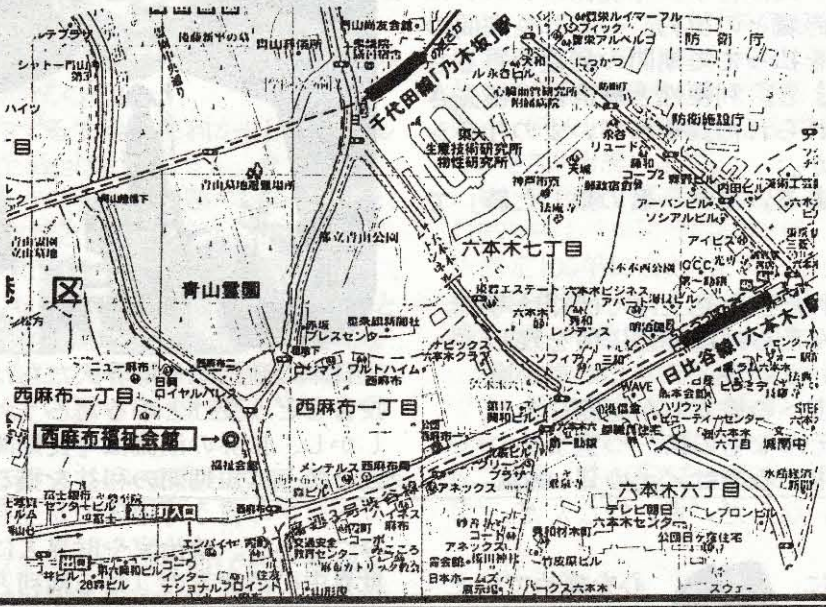
講　　師: 斎藤博康氏
(現・日水コン海外事業部長)

墓　　参: 青山霊園 バルトン碑15:30～16:30
(講演会場より徒歩5分)
墓参の後現地解散

参 加 費: 無　料参加申込みは必要ありませんのでご自由にご参加下さい。

そ の 他: 墓参に参加される方は、藪蚊が多いので服装等にご注意ください。

以　上



「ふくりゅう」では　*原稿を募集*　しています。身近な話題などでも結構ですので送ってください。又、「ふくりゅう」に対する意見等もどしどし送ってください。

宛　先

〒135-0016　東京都江東区東陽7－1－14
東京都下水道局東部第一管理事務所業務課　小松　建司
FAX　043－294－6127
E-mail　k-komatsu@pop12.odn.ne.jp

編集後記

「ふくりゅう」を発行して、12号目です。でも、読者の方からの反応があまりにもない、誰かが、書くだろう、誰かがやるだろうではなく、私がやってやろう。そんな会になってもらいたい。

会の会計が逼迫しているので、通信費の節約をしています。今までですと、行事ごとにお知らせを送付していましたが、「ふくりゅう」で、お知らせしてお仕舞いのケースが増えると思いますので、見逃さないようにして下さい。　(建)